

目的 明治12年（1879）外海地区出津教会の主任司祭になったド・ロ神父が、貧しいこの地の人々に、衣・食・住・医療等の援助ばかりでなく、生きていくためのてだてとしての産業の指導をした。鱈網の工場・ソーメン・マカロニーなどの食品加工に加えて、被服関係の産業の指導にも目覚ましいものがあつた。これを記録に残しておく必要があると考えた。

方法 昭和43年（1968）にド・ロ神父記念館が開館した。多くの品物は既に使われたり、消耗したり、販売されて残っていないが、この記念館の展示品のなかから、当時を探る方法をとった。また手紙や生産品につけて販売したラベルなどからも、理解を深めることができた。

結果 明治12年から33年間、陸の孤島といわれた出津でド・ロ神父が多くの私財を投じて指導したものは、人々に生きる力を授けることであつた。広幅の織物を織ることのできる機を20台も輸入し、これを織らせた。編物機械での編み物、手回しミシンで脚絆等の縫製もした。足袋の量産のためには、杉の板でサイズごとに多くの型板を作って能率よく作業することを理解させて指導した。

この販売には道路も備わっていないので、「こいで舟」を使って品物を長崎に運んだ。これに使つたと思われる帆も現存する。また有名な貿易商人であつたリンガーにも販売していた。大石シゲから出したローマ字の計算書があり、それには「よりののてののこい2まい60せん」などと、その中にある。